

来訪する神の伝承と民俗

——日仏比較民俗学の可能性をめぐって——



0 はじめに

日本とフランスの伝承と民俗を比較する。なぜそんなことを、と首をかしげたくなるほど周縁的な研究なので、ごく基本的な手順から説明しよう。

昔話をはじめとする口頭伝承の国際比較には、まずアアルネ＝トンプソンの『話型カタログ』がある。とかく批判の多い仕事だが、これを使いこなすのは熟練のいる作業だし、エネルギーが必要である。カタログには、アアルネとトンプソンの頭文字をとってATと名付けられた話型がおよそ2500あり、動物昔話(1～299)、本格昔話(300～1199)、笑い話(1200～1999)、形式譚(2000～2399)、その他(2400～2499)という大グループに分類されている。

それぞれの大きなグループは、さらに下位分類される。たとえば、本格昔話は、魔法昔話(300～749)、宗教昔話(750～849)、ノヴェラ(850～999)、愚かな鬼の話(1000～1199)に分けられる。

この分類は、実に分かりやすいし、使いやすい。今回のテーマである「遊行する神々」の場合は、宗教昔話に分類された話型を調べればよい。

宗教昔話には、さまざまな神や聖者、あるいは悪魔や鬼などが登場するが、「遊行する神々」の伝承(AT750A/B/C/D/E/F/G/H、AT751A/B/C/D、AT752A/B/C、AT753A)などに集中している。

このカタログには、話の要約と、話を構成するエピソード、モチーフなどが紹介され、さらに国別の類語数や資料名があげられているが、いずれも参考程度と考えるほうがよい。まともな国際比較を考える場合には、さらに国別カタログに向かっていく。

国別カタログは、それぞれの国に蓄積された昔話の資料を、その国の独自性を生かしながら、なおかつ国際比較が可能であるように、分類整理したものである。

日本の代表的な国別カタログは、いうまでもなく関敬吾による『日本昔話集成』とそれを増補した『日本昔話大成』である。このカタログは、話型に関の頭文字をとってSのナンバーが割り当てられているが、多くの場合ATとの関連が示されている。関のカタログ



に見られる「遊行する神々」の伝承は、本格昔話のうち「大歳話」のサイクル (S197～S204) に、猿長者 (AT750)、宝手拭 (AT 1480、AT750C)、弘法機 (AT750C)、大歳の客 (AT750A)、疫病神 (AT750)、貧乏神 (AT750A)、大歳の火 (AT750)、笠地藏、大成の亀(AT613)として紹介されている。

フランスの国別カタログは、ポール・ドラリュとマリー＝ルイーズ・トゥネーズによるものである。このカタログは極めてすぐれた仕事だが、未完である。

だが、幸いなことに、宗教昔話のカタログは 1985 年にトゥネーズの手で刊行された。(Marie - Louise TENEZE, *Conte Populaire Français Tome IV, Contes Religieux*, 1985)

フランスの話型には、頭文字Tがつけられているが、アアルネ＝トンプソンの分類とほぼ一致する。これは、アアルネ＝トンプソンが、自らのカタログの分類の基礎にヨーロッパの昔話をすえたためである。ヨーロッパに端を発した昔話や民俗の研究が、ヨーロッパ人に都合良く出来ているのは、癪だけれど、やむを得ぬことである。

そこで T750、T751、T752、T753 の話を中心に調べてみる。いずれも、イエスと弟子のパウロが地上を旅するなかで、貧しい者に宿を乞うて歓待されるが、富者の家では冷遇される。そこで貧しい者は報いを受け、富める者は罰を受けるという類の話である。

日本では、これが弘法大師や行基菩薩の奇跡譚になっていることが多い。

これを、どう分類するかには、切り口はいろいろあろうが、ここでは戦略的に4つのグループに分けて考える。

- ① 牧畜にかかわる話 (T750「神様と牛飼い」)
- ② 農耕にかかわる話 (T752「納屋のキリストとペテロ」「不思議な刈り手」)
- ③ 鍛冶にかかわる話 (T753「キリストと鍛冶屋」)
- ④ その他の食べ物や技術にかかわる話 (「洗濯」、AT751「パンと欲張り女」)

詳しく話を紹介している余裕はないが、

① の「神様と牛飼い」は、貧しい牛飼いがイエスとペテロを歓待するために大切な牛を屠ると、翌日には牛が生き返っているという奇跡譚。この時、食べた牛の骨を丁寧にとっておくというのも、この話の一つのポイントである。



② の「納屋のキリストとペテロ」や「不思議な刈り手」は、キリストが歓待の礼に畑の麦をたちまち刈り取ってみせたり、冷遇の罰に収穫物を台無しにした話である。

③ の「キリストと鍛冶屋」は、かならずしも宿を借りるわけではないが、鍛冶屋の親方の前で奇跡を演じ、それを真似た親方に恥をかかせる話。

⑤ の「洗濯」は、日本で「弘法機」として知られる話に近い。貧しい女が、キリストを温かく迎えて、

⑥ たくさんの布を干に入れる。

このタイプの話は、アジアでもヨーロッパでも昔からよく知られているだけでなく、文字の記録も多い。中世ファブリオー研究の第一人者であったジョゼフ・ベディエも、その主著『ファブリオー』のなかで、この話をとりあげ、ギリシャやチベット、中国の説話集からの類語を紹介している。日本にも、弘法、行基の伝説としてだけでなく、風上記の

富士と筑波の話をはじめ、いくつか古い記録がある。

しかし、ペデイエも正直に告白しているとおり、この話のタイプをあれこれ比較して、どのタイプが一番古いかとか、どのモチーフがどんな起源をもっているかというよう
な研究は、無理であるし、そんな奇跡の探求につき合うのは、本橋の目的ではない。

大切なことは、世界の各地に遊行する聖者の奇跡譚があり、それが語り手たちの暮らしに、深く根ざしていたということである。

たとえば、フランスと日本は、宗教的には、キリスト教と日本教という大きな違いがあると言われ、名著『菊と刀』に代表される様々の文化論が語られてきた。神とカミの相違や、罪と恥の文化的差違などに依拠する考察は、枚挙にいとまがない。しかし、昔話の世界では、同じように遍歴する聖者の奇跡が世界各地で語られ続けてきなのである。

つぎに、この訪れる神に対する信仰を、日本とフランスを中心としたヨーロッパの民俗の間で考えてみたい。

II 神を迎え、神を送る民俗

日本民俗学は、来訪神に関する研究を中心に据えてきたと考えてもよい。柳田国男の『先祖の話』や折口信夫のマレビト論を引くまでもないだろう。日本人は、四季折々に神を迎え、神を送る祭りを繰り返してきた。

そのもっとも見やすいかたちが、盆と正月を中心とした祭りである。この季節になると人々は、現在でも、山から松を切り出して門松を立てたり、盆棚や正月棚をもうけて祖霊やトシガミを迎えて、ハレの食事を用意し、ともに食し、カミや祖霊の力を分けていただくことがある。祭りが終わると、ドンド焼きをして天にカミを送ったり、精霊流しをして川や海のかなたに帰っていただく。



関敬吾が「大歳話」としてまとめた話の登場人物の多くが、年の暮れに訪れる不思議な来前者であり、この種の語りの多くが大歳の季節を選んで語られたことも、よく知られている。

私たち日本人には、あたりまえのように思われてきたこの神迎えの民俗が、フランスをはじめヨーロッパ各地に見られる。

ここでは、成の暮から新年にかけて、クリスマス、公現祭、カーニヴァルと続く「冬祭のサイクル」と、春から初夏にかけての、復活祭、精霊降臨、聖ヨハネ祭とつづく「春祭のサイクル」にわけて、簡単に紹介しよう。

(1) 冬祭のサイクル

クリスマスは、いうまでもなくキリストの降誕祭だが、現在のように12月25日に決まるまでには、曲折があった。たとえばローマ暦にあわせて1月1日にしようとしたり、1月6日にしたこともあった。現在では、この1月6日は、東方の三博士がキリストを祝福に訪れた日ということで「公現祭」という祝日になっている。

クリスマスから公現祭までは「12日（あるいは12夜）」と呼ばれ、新しい歳を迎える季

節の変わり目であり、精霊たちの訪れる特別な時とされていた。この時期、人々は、みだりに森に入ることを慎み、糸紡ぎや、厩の掃除などの労働を避けて、訪れる精霊たちを驚かせぬよう注意を払ったのである。

クリスマスにツリーを立てることは、あまり古い習慣ではない。しかし、昔からクリスマスが近づくと森から木を切り出して、大きな薪を用意した。家族が火のまわりに集まり、一年の幸せや健康を折ったのである。いまでも、フランスのクリスマス・ケーキは太い薪のかたちをしていることが多い。

クリスマスが、冬至の時期と一致することは、多くの民俗学者によって指摘されてきた。

冬至は、一年間働きつづけた太陽が死を迎え、新しい小さな太陽が生まれる時期である。この時期をキリストの降誕祭に選んだことは、意味深い。冬のさなかに生まれた太陽と神の子の小さな生命が、厳しい寒さと戦いながら育まれていくのである。



ヨーロッパ各地の町や村にサンタクロースなどの不思議な来訪者がやってくるのもこの季節である。サンタクロースは、本来オランダのシンタークラス（聖ニコラス）が訛って伝えられ、アメリカで落ち着いたものと考えられるが、冬のさなかにプレゼントをもって子供たちを訪れるのは、「サンタクロース」や「クリスマスおじさん」ばかりとはかぎらない。イタリアのベファーナ、ドイツのペルヒタ、ロシアのバブーシュカのような魔女は、1月6日の公現祭の夜にやってきて行いのよい子供にプレゼントをくばる。スウェーデンやフィンランドなどの北欧では、ユル・ニッセ、ユル・トムテなどの小人や鬼が贈り物をもって

くる。これらの来訪者は、時には行列をつくってやってくるが、その行列は村の若者たちによってこっそり準備され、仮面仮装のうちに姿をかかして行われた。



この行列の中心は、もちろんサンタクロースのように優しい存在なのだが、なかには恐ろしい獣や、死者や、妖怪がふくまれていた。彼らは、鞭や鎖をならしたり、鈴や鐘を響かせたり、とにかく騒がしい。

行列は、村の家々をまわり、子供たちの様子を聞き、よい子にはプレゼントを与え、悪い子は袋にいれてさらってしまうと俗じられていた。

こうした仮装の来前者の訪れは、私たち日本人に男鹿半島のナマハゲや甕島のトシドンのような日本の神々を思い出させる。たとえばナマハゲの場合は、大晦日や小正月の晩にこっそり支度をした若者たちが、鬼の面をつけて村の家々を訪れる。そして大きな音をたてて暴れ回り、「怠け者の子供はいないか。いれば取って食う。」とおどす。

彼らは、よい子をほめ、悪い子を罰して、家族と共に食事をして帰っていく。この来訪

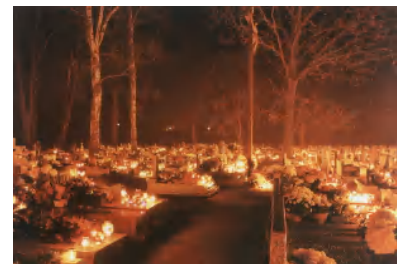
神たちは、日本でもヨーロッパでも、祖霊としての死者と同一視されている。彼らは、一方で悪霊を祓い、豊かな実りをもたらす村や家の守護神でありながら、同時に鞭をふるい人を食う人さらいとして恐れられているのである。

こうした来訪神の訪れは、2月中旬のカーニヴァルまで、さまざまの形で繰り返されるが、つぎに春祭りのサイクルをとりあげて、祭りのもう一つの側面を見てみよう。

(2) 春祭りのサイクル

冬祭りの中心がクリスマスであるとするれば、春の祭りの中心は5月1日のメイ・デーであるといってもよい。メイ・デーは、いまでこそ労働者の祭典だが、古代のケルト人たちの間では「バルティナ」あるいは「ケートハブン」と呼ばれる祭りだった。

ケルト人たちは一年を暖季と寒季の二つにわけ、暖季を迎えるこの日を、寒季の訪れる11月1日の「サアオイン」あるいは「ハロウマス」の祭りとともに、季節の変わり目の祭りとして大切にしていた。この祭りの前夜は「ワルプルギスの夜」などとも呼ばれ、魔女たちがサバトを開き跋扈するとも伝えられていた。11月1日の「ハロウマス」の前夜が、やはり「ハロウィーン」などと呼ばれて悪霊の訪れる日とされていることも興味深い。



季節の変わり目に訪れる魔女や悪霊という超自然的な存在は、キリスト教の行き渡る以前には死者の霊・祖先の霊であったのだ。

この5月1日の前夜に若者たちは森に入り、大きな5月の木（メイ・ポール）を伐ってきて、町や村の広場に立て、盆踊りのようにみんなで輪になって踊る。あるいは、メイ・ポールの小さいのを自分の意中の娘の窓辺に立てる。



この木は、森の精霊・祖霊の宿る木であり、新しい季節の訪れを祝福し、町や村や家族の幸せを守るのである。それは、豊かな生命力と生産力の象徴なのだ。



この5月の祭りには、北フランスでは「フェュー」「モシュ」などと呼ばれる樹木の精霊が登場することもあった。彼らは、頭のとっぺんから足のさきまで葉と花でつまれ、村の家々をまわって祝福する。南フランスでは、5月の女王（メイ・クイーン）が花の冠をつけて、家々をまわることもある。いずれも、森の聖なる力を身につけて人々を祝福して歩く来訪神であると言えるだろう。



春の祭りには、この他にもさまざまなタイプがある。たとえば5月3日の十字架発見の祝日に森からハシバミの小枝を切り出して、教会で祝福して小麦や葡萄の畑にさして、豊かな収穫を願う行事。これは、日本の庭田植えのような予祝行事とよく似ている。

また、昇天祭に先だって行われる豊穰祈願の道行きでは、早朝、司祭を先頭に教会を出発した行列が、旗を立て聖遺物を担って、畑をまわって祝福して歩く。聖遺物というのは、キリストや聖人たちの遺品である。骨や歯や髪などという気持ちの悪いものばかりだが、これを金ピカの厨子に入れて御輿のように担いでまわるのである。



都市の祭りの場合、もうすこし仕掛けが大きい。日本の神社の講組織に似た信心会や職能集団であるギルド、修道院などがそれぞれ旗や山車を持ち、競い合って町を練り歩く。いくつもの御輿や山車の出る日本の都市の祭りを思い起こして欲しい。



中心となる山車は、時にはドラゴンである。このドラゴンは、かつて町を支配していた自然の力や異教の象徴であり、聖人がこれを駆逐することで、秩序を生み出したと伝えられる。

この原初のカオスを再現するドラゴンが町を再びおびやかす、これを倒すこと。でもう一度新しい秩序を打ち立てる。こうした祭りの構造が、ここには明確に示されている。

III 基本構造の比較

ここまで、遊行する神々の伝承と、それを取りまく民俗をいくつか紹介してみた。つぎに、主要なトピックスを選び、日本とフランスをはじめとするヨーロッパの民俗の基本を比較してみよう。まずは、他界の構造である。

(1) 他界の構造

この世の生を終えた後、人の魂はどこに行くのか。これは、洋の東西を問わず大きな問題である。

日本人の場合は、しばらく近隣にとどまり、やがて高くたかく上って霊山のいただきに至ると語ったのは、柳田国男であった。

もちろん、霊魂の行き先は遥か水平線の彼方の水底の国にあることもある。かつて、沖縄のウタキ（御嶽）を調査したとき、「ウタキの岩が、じつは海の底につながっているのだ」という伝承を聞かされたことがある。もちろんウタキはムイ（杜）と呼ばれる山の上であり、天に向かって高くのびたクバの木を聖域としている。おそらく死者の魂は、このクバ



の木をつたって天にのぼり、遥かまた奥のヤマに憩っているのだろう。そのヤマは天につらなり、天は海にしずみ、水底はウタキの聖なる岩につながっている。

だからこそ、村で営まれる海神（ウングミ）の祭りには、祖霊たちが山の神と海の神になって訪れて、交歓し、贈り物を交わし、生者たちを祝福して帰っていくのだろう。村には、人々の住む家があり、それを取り巻くファルという田畑の生活空間があり、さらに

その奥に、ウタキとムイとヤマ、そしてニライ・カナイという遥かな他界が控えている。他界は、神々＝祖霊の聖なる住処であり、彼らは季節の変わり目ごとに、子孫を祝福するためにやってくる。

フランスをはじめとするヨーロッパの国々の他界も、同じ構造をもっているといっ
てよい。もちろんキリスト教の教義では、死者の魂は天国か地獄、はてまた煉獄などに行
くのであって、近隣をふらふらしているはずはない。しかし、昔話の世界では、森は魔物に満ちている。
百鬼夜行に似た魔物たちが群をなし、まっかなホウズキ色の目をした
魔女や、小人たちが隠れ、魂のない巨人や言葉を話す動物が潜む。



これらの超自然的な存在の住む森が、実は死者や祖霊の住む他界であることを指摘したのは、ロシアの民俗学者ウラジミール・プロップだった。

プロップによれば、昔話の主人公たちは、一人前になるためのイニシエーションを受けるために森に入り、死者たちに出会い、試練を受け、戦いに勝利をおさめ、村や町にもどってくる。魔法昔話は、神話とおなじく若者を大人の世界に導く、物語なのである。森の住人は、時に恐ろしい姿をとるが、実は若者たちに生きる力と知恵を授ける祖霊でもある。

この不思議な力をもった祖霊を迎えるのが、折節に祝われる祭りなのである。季節の端境という危機の時に、人々は森に入り、木を伐り、村や町や家庭に持ち帰る。森の自然のもつ力呼び込み、そこに住む祖霊を招いて加護と祝福を得るためである。

こうした祖霊の多くは、仮面をつけ、姿をやつしてやってくる。サンタクロースも魔女のペルヒクも、カーニヴァルの仮装者も、みな他界からの神々を演じているのである。

春祭りのフェイユーやメイ・クイーンも来訪神である。彼らは、日常生活をとりまく身近な他界からやってくる。

ヨーロッパにおける代表的な死者の住処、他界は森であるといっただろう。民間信仰のレベルでは、ヨーロッパにおいても他界はそれほど遠くない。生活をとりまく近隣の森にあるといっただよい。

(2) 祭りの構造

① 年中行事の円環的構造

日本の国に四季折々の祭りがあるように、ヨーロッパ各地にも季節にしたがって、さまざまな祭りがある。

とくにフランスはカトリック国であるから、1年はすべて聖人たちに司られ、守護されている。その社会は伝統的に農耕と牧畜を営んできたのだから、年中行事の基本構造は生業、とくに農耕のリズムに沿っているといっただろう。

太陽の力が衰え、死に至る時期に、新しい小さな太陽の誕生を祝う冬至の祭りとしてクリスマスがある。ちょうど日本の正月が、大正月、小正月、節分などと何度も繰り返す祝われるように、11月初めの万聖節、万霊節あたりから冬祭りのサイクルがはじまり、クリスマスから公現祭、カーニヴァルと祭りが続く。春の祭りは、復活祭にはじまり、豊穰祈

願、メイ・デー、聖霊降臨といった具合にすぎて、夏至の聖ヨハネ祭を迎える。秋には葡萄の収穫祭などがあって、また冬を迎える。

ヨーロッパの場合も、祭りは年中行事の円環的構造をもっていることを忘れてはいけない。この円環の節々に神々が訪れ、送られていくのである。

② 神まつりの構造

日本の祭りの基本は、神迎えと神送りにある。たとえ神社があっても、神は社に常住しない。祭りの初めに神を迎え、祭りの終わりに神を送る。神は、祭りの間だけ人々とともにあり、祭りの終わりとともに山や海の聖域に帰っていく。

キリスト教の場合はどうだろう。これもまた神は常住しない、というのが私の考えである。たとえばミサの場合を考えてみよう。キリストは、世界中のすべての教会に多少の時差はあろうと、顔を出す。とくに日曜日などは大変だろう。司祭は、信者とキリストの間に立ち、パンと葡萄酒を捧げ、これをキリストの肉と血に聖変化させて、信者とともに食する。



構造的に考えると、これは日本の正月と同じである。歳神は、各家庭の正月棚の飾りに依りついて、年男である主人からハレの食事を供される。その後、家族の者は神の食べものと同じものを食することで神と一致する。これは、キリスト教の信徒が、ミサのクライマックスに<キリストの体であるパン>を食べ<キリストの血であるぶどう酒>を飲んでキリストと一体化するのと同じ構造である。

これと同じく、ヨーロッパの豊穡祈願の祭りの基本も、やはり日本の祭りと同じ<神迎え>にあると思う。司祭は、聖人の旗や聖遺物に依りついたキリストや聖人を、日本の祭りの幟や御輿のように、掲げたり、担いだりして、村の畑に案内する。途中、あちこちに止まって祝福を与え、御輿の御旅所のようなチャペルや道脇の十字架の前で休んで、共同体を一巡して帰ってくる。



やはり、神は教会に常住せず、祭りのたびに呼び出されると考えるのが自然である。

日本の神が祭りの終わりとともに山や海という異界に帰っていくのと同じように、ヨーロッパの神も、ミサや豊饒祈願の祭りが終わると天に帰っていく。

日本でも、ヨーロッパでも、人は日常の場で神と顔をあわせていることは出来ないので、ハレ（祭りの時間）とケ（日常生活）の<時>と<場所>を上手に使い分け、神の宿る場所には注連縄をはったり、ランプやろうそくをつけたり、結界を用意して、聖なるものとの接触をさげ、日常生活をおくっているのである。

IV まとめ——比較民俗学とはなにか——

比較民俗学とはなんだろう。

昔話研究の世界では、当初から国際比較が為されてきたし、人間の日常の営みも文化人類学の世界では、比較が当然であった。

だが、一般に「民俗学」というと、どうしても「一国民俗学」という自己規制が働いてしまうような気がする。とくに、日本の民俗学にはその傾向がつよい。私がここで敢えて「日仏比較民俗学の可能性」などというサブタイトルをつけてしまったのは、そのせいである。

「比較民俗学」などと改めて断らなくても、民俗学はもともと国際的だった。それは、フレイザーを読めばよくわかる。「金枝篇」には、ここに挙げたような事例はいくらでも

出てくる。柳田国男でさえ、フレイザーを精読して育ったのだ。

だが近代は、どこの国でもナショナリズムが強くて、民俗学はその自分探し、ナショナル・アイデンティティの確立に力をかしていたように思う。

20世紀も終わりに近づいて、ようやくこのナショナリズムに多少の反省が訪れて、ポスト・モダンの時代がやってきた。たとえば、歴史や文学の分野で、国史や国文学の時代が終わり、日本史・日本文学の時代となり、さらに「アジアのなかの日本史」とか「世界文学のなかの日本文学」というように外側との関わりのなかで学問のあり方を問う時代が訪れた。

民俗学にしても同じことで、日本一国で完結する「民俗」などというのは近代の幻想である。衣食住すべてにわたって、生活は世界に向かって開かれている。こんなことは常識なのだが、近代に住む私たちには、おのずから国家という制度があり、共通の言葉があり、教育がある。この枠組みを超えることは、至難の業である。

比較民俗学は、多少なりともこの国家の枠組みを超える上で役に立つ知見 (transnational knowledge) を提供できるかもしれない。幸いなことに、日本民俗学には「日本」および「日本人」についての豊かな蓄積があり、これを手がかりとして比較に着手することができる。民俗学の垣根を高くして、そとの世界をステレオ・タイプの眼鏡で見るのは、そろそろ止めましょう。「キリスト教」対「日本教」とか、「罪の文化」と「恥の文化」などという大雑把な図式を離れて、もう少し細かく思考を組み立てる必要があるようである。



これは、「説話・伝承学 Vol.7」(1999年4月 説話伝承学会)に掲載された「来訪する神の伝承と民俗」に加筆したものです。